

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18530504
 研究課題名（和文）外国籍児童のいる学級のための教育実習システム構築の研究
 研究課題名（英文）A Study for the System Construction of Teaching Practicum in a Classroom
 Involving Children of Foreign Nationalities
 研究代表者
 山口 陽弘（YAMAGUCHI AKIHIRO）
 群馬大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：80302446

研究成果の概要：外国籍児童のパーソナリティ測定的基础となる心理尺度の一部を各種の学術誌・学会で発表を行った。これらは、最新の脳科学の知見を活かした質問紙尺度であり、学級経営などを行う際の資料としても活用可能な研究である。また、より実践的な外国籍児童への適応教育・補償教育を行うために、音読作業記憶などの認知面での諸能力を測定するための方法も検討し発表した。これらの基礎研究をもとに学部・大学院において、外国籍児童のいる学校への各種実習を授業の一環として成立させ、H20年度より本学で設立された教職大学院とも連携した教育実習システムの基礎作りを行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	600,000	4,100,000

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学級経営、多文化共生、教育実習

1. 研究開始当初の背景

群馬県においては、太田・伊勢崎市等を中心に南米系の移民が多く来日し、彼らが自国から連れてきた児童、さらには日本で生まれた児童が激増している。こうした外国籍児童

の増加問題は、1990年代以降、日本各地にみられることであり、ほぼ十年間で外国人登録者数は1.5倍になっており、全国では実数として二百万人を超すとみられている。

ここで問題になるのが上述したニューカ

マーの次世代にあたる彼らの児童の問題である。学級に数名の外国籍児童がいることがほぼ日常化した太田・伊勢崎地区においては、特に小中学校の学級経営の取り組みに関して、言語、習慣、文化の違いから来る戸惑いから、現場の教員から実証的な学習援助の方法を求められることが非常に多いのである。

こうした点が研究開始当初の背景としてあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の群馬での状況を受けて、外国籍児童の学級適応のための具体的なツール（たとえば心理尺度、補償教育法）を開発することである。その上で外国籍児童に対しても十分なケアをする能力を、教員志望者に培ってもらうための教育実習システムの構築を目指すことである。

さらに最終的には、学級内に存在する外国籍児童の、学級内での適応を促進する手段を見だし、彼らの就学、さらには就労をも援助できないかと考えていた。

3. 研究の方法

研究初年度においては既に群馬大学で構築されている教育実習システム・インターンシップシステムをさらに拡充することを前提とし、その際に実習生の得た経験のうち、何が最も有効であり、どの部分を改善すべきかをサーベイした。いわば独立変数にあたる部分をきちんと洗い出す作業を行った。

本研究における独立変数にあたるものは、「教育実習の形態・内容」となる。この部分を群馬県内だけで検討するのではなく、他県の状況も踏まえることは非常に重要なことである。外国籍児童への対応において、県の間で大きな差異があることは、これ

までの研修講座の開催（三重県、愛知県、茨城県の先生方との交流を行った）で分かっている。

この結果、既に茨城県、三重県、愛知県の様子はだまかにはうかがえた。この他県の外国籍児童への取り組みについて、さらに他県への聴き取り調査を行い、各県教委、および現場の教職員への意見、当該の教員養成大学の担当者から多くの情報を得た。

この聴き取り調査をもとにして、可能な範囲で群馬大学の現在の教育実習システム・インターンシップシステムに組み入れる可能性を探ることを、さらに検討した。この際、既に協力校として現在、インターンシップシステムを受け入れている太田市立旭小学校の校長はじめ多くの現職の先生、さらにはインターンシップ事業を立ち上げている群馬大学の古屋健、所澤潤両教授（連携研究者）とも共同で検討を行った。

ここで得た成果の一部を、公開・研修講座の開催（群馬県総合教育センター）を県教委と連携しつつ行った。

以上のように、聴き取り調査、予備調査をもとに外国籍児童への教育実習システムの構築の叩き台を作っていく方法をとった。これと平行させて、外国籍児童にも適用可能な心理尺度、外国語能力の測定のための信頼性の高い測定方法の工夫等の基礎的な研究を行っていくという理論と実践を融合させる方法であった。

4. 研究成果

(1) 研究初年度、および次年度において

研究初期における主要な成果は次の二点であった。

第一は、日本心理学会でシンポジウムを開催したことである。これは2006年11月3日、日本心理学会第70回大会（九州大）におい

て、「外国籍児童の学校教育への適応のために<言語教育の面に着目して>」と題して、研究代表者の山口陽弘主催で自主シンポジウムという形式で開催された。企画者が山口陽弘（群馬大学准教授）、司会者が古屋健（群馬大学教授）、話題提供者が所澤潤（群馬大学教授、指定討論者が久野雅樹（電気通信大学准教授）、黒沢学（東京電機大学准教授）、清水真紀（高崎健康福祉大学専任講師）というメンバー構成であった。このシンポジウムでは認知心理学、言語学などの観点から、第二言語習得時の母語の役割の重要性、また概念形成・発達段階の重要性について議論を深めた。特に小中学校の教育場面では「生活言語」と「学習言語」との違いを意識して教育することが重要だと言われているが、その「生活言語」「学習言語」とはアカデミックな研究においては何を示すのか、ということをもより操作的に定義するための重要な議論を行った。

第二の成果は、日本人児童、および外国籍児童双方に汎用可能な、性格検査、特に気質面における基礎的な考察・調査を進めた点である。この成果は、基礎的な論文として「パーソナリティ研究と神経科学をつなぐ気質研究について」群馬大学教育学部紀要に、また実践に活用可能な尺度を検討したのものとして「Temperament and Character Inventoryの因子的妥当性について」群馬大学教育学部教育実践研究にまとめて掲載した。

さらには、不適応に陥る原因を、認知神経科学的に考察した論文を群馬大学教育学部紀要に発表し、同じく「Grayの気質理論と反応スタイル理論との関連」を群馬大学教育実践研究に発表した。

これらの諸研究は、いずれも人間の気質・性格の一般的な論考から始まり、実際に使用するための尺度についても精緻に論じたも

のである。こうした異なる二方向からの成果は、本科学研究テーマを進めていくにあたって、きわめて重要な進展を示したと考えるものである。

（2）研究最終年度の発表

最終年度においては、外国籍児童のパーソナリティ測定的基础となる、CloningerのTCI尺度の暫定的なまとめとなる研究をパーソナリティ研究に発表した。同様に、GrayのBIS/BAS尺度研究結果を日本心理学会の学会発表、および群馬大学の紀要にまとめた。

これらは、最新の脳科学の知見を活かして、それを質問紙尺度で再現したものであり、学級経営などを行う際の資料として大いに活用できることが期待される基礎研究である。

こうした基礎研究のみならず、より実践的な外国籍児童への適応教育・補償教育を行うためには、音読能力などの教育的な測定が必要になってくると思われる。この際関わってくるのが音読作業記憶などの認知面での諸能力であるが、これらを測定するための方法は、まだ十分確立されているとは言い難いし、その測定法の信頼性に関してもまだ不十分である。この測定のためには、音読テストの評価法などの確立が必要であるが、そのために一般化可能性理論を駆使して、その信頼性を高めることに成功したので、この成果を同じく各種学会で発表し、群馬大学紀要にまとめた。

（3）教職大学院設置との関係、教育実習システムの構築

研究最終年度において、様々な偶然も重なり、群馬大学で教職大学院が設置された。この設置の際に、著者および連携研究者も大きく関わり、この三名とも教職大学院の専任教員となり、基本的な設置方針にも大きく参画した。

本学の教職大学院の大きな特色として、次の四点がある。

第一がティーム・ティーチングである。

研究者教員と実務家教員の協働は、どの教職大学院でも謳われているが、本専攻では9割以上の授業で、研究者教員と実務家教員が協同で授業を構成し TT を行い、理論と実践知の融合を目指している。

第二が充実した実習である。2年間で、のべ500時間を超える実習が設定されている。

1年次前期の【課題発見実習Ⅰ】は、4つの附属学校園で2日間ずつ行われる。3歳から18歳までの健常児及び障害児の発達を理解するとともに、校種を越えた学校教育全体のつながりを把握し、学校教育の全体構造の理解を深める。

1年次後期の【課題発見実習Ⅱ】は、3校で60時間ずつの実習を行う。実習校は附属学校と18の連携協力校で、小学校と中学校、大規模校と小規模校など、バラエティに富んでいる。この連携協力校の中に、外国籍児童を多く含む学校を入れる試みを行い、実際に連携協力校に入ってもらった。

2年次の【課題解決実習】は、通年で240時間が設定され、学部新卒者は協力校で、現職教員は勤務校で、教科指導・学級経営・児童生徒指導の実践力の向上を目指す。この際、「多文化共生」を研究テーマにした院生は、外国籍を多く含む連携協力校で教育実習をしつつ、外国籍児童のための補償教育の理論の構築をしていくことになる。

第三が、課題研究と実習の連動である。課題研究は学生一人ひとりがテーマを設定して2年間取り組むものである。この課題研究の指導も、研究者教員と実務家教員のペアで行うという方法がとられている。この際に、外国籍児童の指導経験の豊かな実務家とも

協力してそのテーマについては助言していくシステムを構築した。

第四の特色が、まさに、本科学研究費テーマとも合致するもので、本科学研究費テーマの中心となるものである。すなわち、多文化共生マインドを育成するため、多文化共生教育を必修科目としたことである。主として東毛地区に多い外国籍児童の多くいる小学校の現場を参観して担当教諭・南米人指導助手と質疑応答したり、院生が考案した研究授業を日本語学級で試行したりしている。この研究授業は、第一から第三までの特色とも重複するが、外国籍児童の多い2小中学校を連携協力校に指定しているため、可能となったものである。

以上の教職大学院のカリキュラムの中での四つの特色のいずれにも本科学研究費テーマは深く関わっており、特に第四のテーマを教職大学院設置の際に盛り込むことで、外国籍児童への教育実習システムの構築は一定の成果をおさめることが出来たと言える。

しかし、まだ学部生への教育実習システムの構築はインターンシップ、体験的科目等の一部のボランティア的な選択科目の中にとどまっている。今後の課題は、学部での教育実習に、外国籍児童への配慮を促すシステムをさらに拡充させていくことであり、現在もその充実を図るべく努力している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 山口陽弘・清水真紀 「英語学習者のための音読テストの信頼性の検討」 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 58, 155-168. 2009、査読無
- ② 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一 「うつ

病において報酬系の機能は阻害されるか？—うつ病と報酬系に関する認知神経科学的検討—」群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **57**, 219-234. 2008、査読無

- ③ 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一 「Grayerの気質理論と反応スタイル理論との関連」群馬大学教育実践研究, **25**, 281-289. 2008、査読有
- ④ 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一 「Cloningerの気質・性格モデルとBig Fiveモデルとの関連性」パーソナリティ研究, **16**, 324-334. 2008、査読有
- ⑤ 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一 「パーソナリティ研究と神経科学をつなぐ気質研究」群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **56**, 359-377. 2007、査読無
- ⑥ 国里愛彦・山口陽弘・大久保智紗・鈴木伸一 「Temperament and Character Inventoryの因子的妥当性について」群馬大学教育実践研究, **24**, 387-396. 2007、査読有

〔学会発表〕(計4件)

- ① 国里愛彦・淡野将太・山口陽弘・鈴木伸一 「項目反応理論による日本語版BIS/BAS尺度の検討」第72回日本心理学会(北海道大学) 2008. 9. 21. 札幌
- ② 山口陽弘・国里愛彦・大久保智紗 「TCIの下位尺度項目の検討—因子的妥当性の観点から—II」第43回日本教育心理学会(文教大学) 2007. 9. 15. 埼玉
- ③ 山口陽弘・古屋健(企画・司会) ワークショップ「外国籍児童の学校教育への適応のために<言語教育の面に着目して>」

第70回日本心理学会(九州大) 2006. 11. 3. 福岡

- ④ 山口陽弘・国里愛彦 「TCIの下位尺度項目の検討—因子的妥当性の観点から—」第48回日本教育心理学会(岡山大学) 2006. 9. 16. 岡山

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 陽弘 (YAMAGUCHI AKIHIRO)
群馬大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：80302446

(3) 連携研究者

所澤 潤 (SHOZAWA JUN)
群馬大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：00235722

古屋 健 (FURUYA TAKESHI)
群馬大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：20173552